

嘴から橋まで、箸のお話

ほしひかる*

「箸休め」という言葉がある。主な料理の間に口直しとして供される食べ物のことである。このエッセイも、渡来蕎麦 ⇒ 寺方蕎麦 ⇒ 江戸蕎麦までやってきたので、ちょっとここで箸休めしたいと思う。

.....
先ずは、箸ならぬ橋のことで心に残る話から始める。
箸と橋で、「ダジャレか」と思われるかもしれないが、そうでもない。まずは聞いていただきたい。

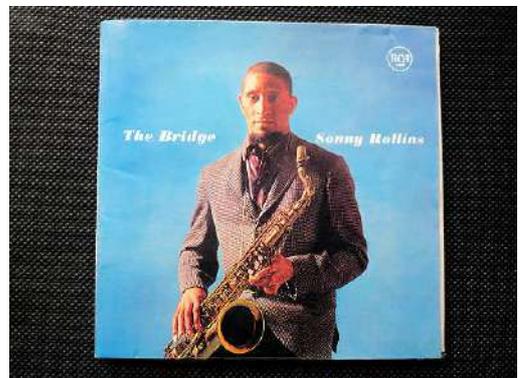
1.男橋、女橋

半世紀も昔のことである。
小諸の懐古園に立寄ったとき、風によって草笛の音が流れてきた。心地よい音色に誘われるまま近づいて行くと、黒い袈裟を纏った乞食坊主が叢に坐って吹いていた。
近づいて話かけると、乞食坊主氏は「大学はどこだ？」と訊いてきた。
答えると、「そうか」と言って、再び草笛を唇に当てた。
曲は「惜別の唄」だった。その旋律は草笛独特の哀調にあふれていて、しかも芯にはしっかりした力強さがあった。
このとき私は、草笛のフィーリングはソニー・ロリンズのジャズ・サクソに似ているナと思ったものだった。

それからロリンズの魅力を再発見し、ジャズが好きになった。
なかでもロリンズのアルバム『橋』はよく聞いていたが、その伝説がまた奮っていた。
演奏の壁にぶつかった彼は 1959 年から活動を休止していたが、イーストリバーに架かる「ウィリアムズバーグ橋」(建設 1903 年)の袂で一人、練習に励み 1961 年 11 月に見事にカムバックした。そのときの曲が「橋」だった。
私は NY を訪れる機会があったとき、「ウィリアムズバーグ橋」に行ってみた。
その橋は、ロリンズが男を磨いた橋、私にとっては 50 年間いだいていた幻の橋だったので見た瞬間、背中にズンと戦慄が走ったものだった。

もう一つの橋は、須賀敦子の「橋」というエッセイである。
「黒い、みじかめのマントのすそが、これも黒い、光沢のあるブーツにまつわって、小刻みにひるがえる。足がわるいのを隠すというよりはかえってそれを弾みにするような歩き方で、彼女は、人ごみをわけては、橋を渡り、やっとひとり通れるほどの細い路地を抜けて行った。」
幼いころに両親を亡くし、叔母に育てられたルチアという友だちがヴェネツィア・カンナレージョ運河に架かる「グリエの橋」(建設 1580 年)を渡って、叔母の家を訪ねる場面だったが、須賀は、その「橋を渡る時は、靴のヒールが、建物にかこまれた道路を歩いているときとは、かすかにではあるけれど、違った音を立てる。」と書いていた。
私は、文章の中でこれほど音の響を感じたことはなかった。今もヒールの音が耳に残るその橋を「女の橋」だと思っている。

そして、この二つの橋 — ロリンズにとってのウィリアムズバーグ橋は、こちら(今日)からあちら(明日)へ架かる希望の橋。ルチアにとってのグリエの橋は、こちら(大人)からあちら(子供のころ)に架かる癒しの橋として、私の心に残るのである。



【ソニー・ロリンズ『橋』】

2. 縄文人の小枝箸

さて、「架け橋」の話から、「食べ物と口をつなぐ箸」の話に移ろう。

人間は、1)手、2)箸(匙)、3)フォーク・スプーン・ナイフを使って食べ物を口に運ぶ。特に熱い物を食べる時などは、2)3)の道具は有効だ。

工学者のヘンリー・ペトロスキーは『フォークの歯はなぜ四本になったか』の中で、フォークも、箸も、熱い物から指の火傷を防ぐために考え出されたと言っている。

熱い食べ物といえば、日本列島に住んでいた縄文人はすでに**煮沸**した物を食べていた。

このことを述べる前に、押さえておきたいことがある。

それは、

「Q：世界最古の土器は何？」

「A：縄文土器」

もう有名な話であるが、参考のために世界の土器出土遺跡を年代別に列記してみると、こうなる。

- ・前1万4,000年 — 日本 大平山元遺跡
- ・前1万3,000年～1万1000年 — ユーラシア黒竜江(アムール川)下流域
- ・前1万1,000年 — 中国 揚子江流域
- ・前8,800年 — 中国 黄河流域

ここから、1)土器誕生は日本が最古であることと、2)しかも**東アジア**に誕生していることが分かる。

じゃ、「なぜ東アジアか？」という、氷河期が終わりに近づいた1万6,000～1万5,000年前、日照時間が長くなり、東アジアは針葉樹林から落葉樹もまじるような森林になった。その結果、わが日本列島に住む縄文人にとって、**団栗や椎、榿、小檜などの固い実などの植物性の食糧**が入手しやすくなり、それらを食べるための、**灰汁抜きに必要な鍋・釜としての土器**が発明されたというわけである。

どういう機会に土器が発明されたかは興味津津であるが、ある部落に利口な者がいて、焚火で動物の肉を焼いた跡を見て、土も焼くと硬くなることに気付いたのが、土器作りの始まりだとされている。

1)日本人の祖先である縄文人が人類で**最初**に「土器」を発明したのなら、

2)日本の縄文人は、人類で**最初に**《煮る》という料理法を発明した人たちである、ということになる。

さて、《煮る》となると、当然水漏れしない土器が必要になってくる。

考古学者の後藤和民は、そのことに気が付き、著書『縄文土器をつくる』では、水漏れのしない煮沸用土器の作り方を詳しく紹介している。

私も、彼が所属する千葉の加曾利貝塚博物館で、実際に**水漏れしない土器**を作り、その土器で煮沸を経験したことがあるが、煮沸用の土器という物は水漏れしないように作るものだ、ということはこのときに初めて知った次第である。

ついでに言えば、人類が発明した最初の料理法は《焼く》ことであった。

その証拠が下記の遺跡であるが、そこから炉址や獣肉、魚を燻製にしていた址が発見されている。

- ・10万～8万6000年前 — ジブラルタル、ヴァンガード洞窟
- ・6万6000～5万4000年前 — フランス、ドルドーニュ地方の洞窟
- ・5万3000年前 — スペイン、アブリック・ロマニ遺跡

そして人類は次の料理法として、《煮る》ことを発明するが、そのときに使用する土器は当然貯蔵用にも使われた。そこから仲間の「定着住」という進化が始まるのである。

さらに人類は**金属器**を手に入れた。これは武器としても強力ではあるが、ここではその話は省くとして、料理用の器具とした場合、燃料の節約という利点を導いたのである。遺跡としては、紀元前1600～1046年 — 中国江西省大洋洲遺跡などから金属器が発見されている。

せっかくだから、もう少し「料理と文明」について話を続けよう。

そもそも、獣類、魚介類の大部分は生の方が美味ではあるが、植物は火熱を通して(焼くか、煮沸して)はじめて食べ物となるものが多い。穀物の代表である米・麦もそうである。それに、生より焼いたり煮沸した方が消化にいい。したがって、**焼く、煮沸する行為が動物からの決別**ということになる。



【スプーン・ナイフ・フォーク型の葉 ☆ほしコレクション】

どういうことかという、動物は消化に悪い食べ方をしているから、一日中物を食べる行為だけ続けている。だから、動物は餌を取ることと、子孫を残すことだけに一生を費やす。

対して、人間は食べる時間が一日のうちに二度とか三度とかに決めるようになり、残った時間は頭脳を使うようになって、知恵が溜まってきたのである。

だから、料理とそれを作る道具は文明の原点であるといえる。

そこで縄文人たちの生活を想像してみよう。

土器を発明したくらいの彼らである。煮沸して熱くなった食べ物を土器の中から取り出すとき、まさか直接手に取るようなことはすまい。

たとえば、鳥が餌を嘴で啄ばむのを見た彼らは、たまたま落ちていた「木の小枝」を拾い、それで突き刺したり、やがては汁類は蛤などの大き目の「貝殻」や「瓢箪」などで杓子の様な物を作って、掬ったにちがいない。

福井県若狭町・鳥浜貝塚(1万2,000~5,000年前)から瓢箪の種が出ているが、これらを杓子などに利用したのだろうか。

あるいは、これまでは「縄文時代は東日本から」とされていたことを覆したともいわれている佐賀市金立・東名遺跡(8,000年前)には、編籠が740個以上(全国出土の7~8割)も埋もれていた。この多数の編籠の出土は、土器同様、縄文人が道具を「作る」ことを行っていた証明といえるだろう。

そういう彼らは川を渡る時は木を倒して橋を架け、熱い物を取るときは小枝を利用したのだろう。「ハシ」「ハシ」と叫びながら…。

私たちが使っている日本語で、テ、アシ、メ、ミミ、ハナ、クチ、ノ、ハラ、カワ、ヤマ、ウミ…など、赤ちゃんでも使えるような短い言葉が原始語だという。

この項では、そうした原始語の中にハシ(端、嘴、箸、梯、柱、橋)やソバ(側、傍、蕎麦)が入っていたらということをお願いしたのである。



【土器 ☆ ほし作】



【木の小枝】

3. アイヌ箸「イクパスイ」

あるとき、アイヌの人と知り合った。彼は背が高く、スーツとネクタイがよく似合う紳士であった。二人が互を意識し合ったのは、同じ姓だったからである。しかし私はそのことを口にしなかったし、彼もまた口にしなかった。

かつて、明治政府がアイヌの人たちに和人になることを強いたとき、姓をもつことも命じた。そのとき彼らに選択の余地はなく、たとえば日本人の監督者の苗字を全員に名乗らされたと聞いていたから、自分と同じ姓であることを手放して嬉しがるのは躊躇せざるをえなかった。

しかし、その躊躇がかえって親しさをまし、食べ物の話になったとき、箸のことも及んだ。

そのとき、彼から祭祀用の一本箸「イクパスイ」のことを教えてもらった。

「そんな物があったのか」と驚いたが、彼は「今度会うときまでに、作ってくる」と言ってくれた。

そして半年後、彼は約束を果たしてくれた。それは見事なアイヌ彫であった。

それは、よく見ると箸の一端が鳥の嘴のような形をしていた。しかも、裏側には舌のような形も彫ってあるではないか。まさに、それは間違いなく嘴であった。



【イクパスイ ☆ ほしコレクション】

使い方としては、祭壇の前に立ち、台付杯(ドキ)の中の酒に一本箸(イクパスイ)を浸し、軽く木幣(イナウ)にかけ捧げるのだそうだ。その様は鳥が嘴で水を飲む姿だ。

彼は付け加えた。「一本箸は、祈願者の祈り(こちら側)を神(あちら側)に取次ぐ神器(嘴)」だそうだ。

このとき私は思った。

「このパスイは、ハシ=箸のルーツだろうか？」

しかしながら、アイヌ人の使う箸が日本の箸のルーツかという、そうはいいい切れないところがある。というのは、アイヌ人の登場自体が歴史的にそう古くはないからだ。

元始、日本列島には縄文人が住んでいた。

自然人類学者の埴原和郎は、こう説いている。

縄文末期か弥生初期あたりから、西日本の一部の縄文人と朝鮮半島から渡来した水田農耕民が混血して、現代の和人に進化していった。一方では、東日本の縄文人はそのまま小進化して → 続縄文人 → 擦文人 → アイヌ人へと変化した、と。

これを分かりやすく図式的に表現すれば、こうなる。

《西日本の縄文人+朝鮮からの渡来人 ⇒ 現代の和人》

《東日本の縄文人 → 続縄文人 → 擦文人 → アイヌ人》

だから、和人とアイヌ人は兄弟分だということになるが、じゃその兄弟が分かれていったのはいつか？
といえば、弥生から古墳時代ということになっているらしい。

とにかく、人種がかように小進化したということは、**アイヌ語も縄文言語が小進化して生まれた言葉**だといえるであろう。

そんなわけで、アイヌ人の祭祀用の箸は、アイヌ人が使用した物ではなく、日本人の遠い祖先か、あるいはアイヌ人の祖先が、「嘴」からヒントを得て作製した物を伝統的に守り続けてきたという可能性が高い。

それに、嘴も口外にある食べ物を**食道内**に取り入れる**架け橋**であるということはいえるだろう。

4. 卑弥呼の箸

故郷の佐賀に帰ったとき、久振りに吉野ヶ里遺跡を訪れた。

ここ吉野ヶ里も、あの『魏志倭人伝』のいう百余国のうちの一つだった。遺跡が発掘された当時はよく「吉野ヶ里から邪馬台国が見えてくる」と言われたものだった。つまりは「百余国と邪馬台国はセットだ＝百余国の近くに邪馬台国あり」という意味であるが、「佐賀・福岡あたりの古代語が日本語の原型」となったとの説があるくらいだから、もったもな話である。

その邪馬台国には、女王卑弥呼(?~247 or 248)が君臨していた。彼女は238年に魏の皇帝曹叡から「親魏倭王」の封号と、「銅鏡百枚」を与えられた。

曹叡というのは、有名な『三国志』に登場する曹操の孫(曹操→曹丕→曹叡→)である。

魏の曹操(155~220)と、蜀の劉備(161~223)と、呉の孫権(229~252)が三つ巴となって戦う物語が『三国志』であるが、わが国の倭王卑弥呼と変わらぬ時代に、彼らの間では「志、恩義、忠義、民を思う政治」などが語られていたかと思うと、中国というクニの歴史の重さと深さに驚かされる。

しかし、である。後漢末の中国の人口は約5,000万人だったと推定されているところ、三国が争ったこの時代は、魏450万人、呉250万人、蜀100万人と、全体で1,000万人を切るまでに人口が大激減したという。その戦死者は、現代の第二次世界大戦の死者総数に匹敵するくらいだ。

これが戦争というものである。歴史の重さとは、その残虐さを併せもっていることも忘れてはならないだろう。

対して、そのころの列島は人口60万人だったと推定されている。

それが佐賀の唐津辺りに朝鮮半島から水稻という農業技術をともなった人たちが上陸して以来、食糧事情がよくなったため、西日本を中心に一躍180万人にまで膨れ上がった。

「そんな倭国の人たちはまだ**手食**だった」と史料研究家は口をそろえて言う。それは『魏志倭人伝』に「籩豆を用い手食す」と記述してあるからだ。

しかし、ほんとうにそうだろうか？

「籩豆」というのは、豆の形をしたような竹製の高杯のことである。それにのせるような食べ物は手で取って食べるであろうし、またいつも私が云うように「その史料を書いたのは誰か？」ということが問題である。

余談ながら、ここで「籩豆」という竹製の高杯が出てくる。先述の縄文遺跡の「編籠」は木の枝や蔓である。

縄文時代にはこの列島にまだ「竹」は存在していなかった。竹は邪馬台国時代に九州に上陸し、近畿王朝のころに近畿地方にまで及び、戦国時代以降に全土へ広まった。

かように『魏志倭人伝』の何気ない描写は情報の宝庫である。

しかしながら、「籩豆」はそうであるが「手食す」というのはどうだろうか？

そもそも、水が清冽な日本列島に比べて、大陸の水はそうでもない。だから中国では煮沸する料理が必須となり、そこから料理した物を食べるのが文明人、それをしない国を野蛮、ひいては食事も手で食べる者を野蛮人と見るようになった。

それが政治的表現になると「蛮国の間人は手で食べているはず」と最初から偏見をもつようになる。

『魏志倭人伝』は貴重な情報が満載であることはまちがいないが、基本は蛮国紹介のガイドブックであることを忘れてはならない。だから、全面的に信用することを躊躇せざるを得ない箇所がないこともない。

とはいっても、箸で食べていた証拠も見つかっていないので、ここでは縄文以来、熱い物を取るときは、木の小枝で突き刺したり、竹や柔らかい枝を折り曲げて挟んだり、または木杓のような物で掬っていたであろうが、基本は手食であったとしておこう。



【吉野ケ里遺跡出土の剣
☆ ほしコレクション】

5. 小野妹子の箸

日本人が正式に箸を使うようになったのは、飛鳥時代からである、というのが日本箸史の定説である。

それはどういうことかというと、**608年**に遣隋使・**小野委妹子**が帰国したとき、同行して来日していた隋使・**裴世清**らを歓待するために、**小墾田宮**(奈良県明日香雷丘)で饗応の宴が催された、その折に**中国式の箸・匙**が用意されたというのである。

遣隋使のことが出たので、ここで当時の東アジア情勢を見てみよう。

わが**大和国**は、推古天皇(在位 **593~628**)、摂政厩戸皇子(聖徳太子、在位 **593~622**)、大臣蘇我馬子(**511?~626**)という体制であった。

朝鮮半島では、**百済国**・武王(在位 **600~641**)、**高句麗国**・嬰陽王(在位 **590~618**)、**新羅国**・眞平王(在位 **579~632**)が鼎立していた。半島三国は、戦争、緊張、小康状態を繰り返していたが、対 大和国だけは地勢上からも味方に付けておいた方が得策であったため、親和外交を図っていた。それが形になったのが、大和国への「**仏教伝達**」やその後の**支援策**であった。

そんなとき、中国では北方の**隋(文帝)**が南方の**陳**を滅ぼし、帝国を建てた。**589年**のことである。それまでの中国大陸は、三国・晋・南北朝時代と**500~600年**間も分裂していた。それを統一したのであるから、有史以来の大事件だった。

その事態に最も危機感をもったのは高句麗である。早いうちにとばかりに高句麗は遼西に侵入した。隋は怒って**30万**の兵をもって高句麗を攻めた。結果は両者共に疲弊した。しかし百済も、新羅も恐怖感をいだき、隋への外交処置を講じた。わが国も倣って小野子を隋へ派遣した。

「聞くところによれば、海西の菩薩天子(煬帝)は、重ねて仏法を興しておられるという。故に、仏法を学ぶために遣いを送った」と讃える言葉で口上し、そして国書を渡した。その国書には「日出る処の天子、書を日没する処の天子に致す」とあった。

隋の煬帝(在位 **604~618**)は「蛮夷の書、無礼なるものあり」と腹の中は怒りで煮えたぎっていたが、彼は父と兄を暗殺して帝位を奪い取ったぐらいの政治臭い男である。半島攻略のためには背後の大和国の存在を無視できないと計算し「また以って聞くことなかれ」と怒りを押さえた。そして煬帝(**39歳**)は裴世清に小野妹子を送らせた。

8月3日、隋使である裴世清と随員**12名**は難波から飛鳥小墾田宮に着いた。

大和朝廷は飾馬**75頭**をもって海石榴市(桜井市)まで出迎えた。

裴世清は宮中で隋からの国書を奉呈した。そして**8月16日**、宮中で歓迎の宴が催され、中国式の箸食作法による饗応をうけた。

大和側は推古天皇(**54歳**)、厩戸皇子(**34歳**)、大臣蘇我馬子(**57歳**)らが居並んでいた。小野妹子と裴世清の年齢は分かっていない。しかしながら、厩戸皇子と煬帝の年齢から想像すれば、二人ともおそらく**30代**の男盛りであったろう。二人は両国の架け橋となるべく、荒海を往復した。

その気持を組んでか、あるいは「和ヲ以テ貴シト為ス」の精神をもっての和親外交のためか、厩戸皇子は再び妹子に、世清の帰国に付き合うことを命じた。

かくて、厩戸皇子は、朝鮮三国とも、隋とも戦わず、一兵も殺さずして、外交で文化を輸入した。大和国には、祖父の欽明天皇(在位 539?~571?)の代に仏教が入っていた(552年)が、それ以来「**仏教によって文化国家にする**」。これが厩戸皇子の目標だった。換言すれば、当時の大和国は文化輸入に貪欲だった。箸食もそうした文化輸入の一つであったのである。

話を「ハシ」の意味論に移せば、厩戸皇子の生母を**穴穂部間人皇女(?~622)**という。また、後の孝徳天皇の皇后も**間人皇女(?~665)**といい、天智天皇の妹・天武天皇の姉に当たる人である。

彼女らの「間人=ハシヒト」という名は、神と人之間にある巫覡のような意味から付けられた名である。それから、天と地の間に立つ「柱(ハシラ)」も、上と下の架ける「梯(ハシコ)」そうである。

これらは決してダジャレではない。言葉の成長である。これらをふくめて「日本は言霊のクニである」という。

6.神の箸

厩戸皇子から中大兄皇子時代(天智天皇)を経て、天武朝になると『古事記』(太安万侶編、712年)『日本書紀』(舎人親王撰、720年)が編纂された。それを私たちは「記紀神話」と呼んでいるが、箸伝説についても幾つか掲載されているので、解釈を試みてみよう。

1)倭迹迹日襲姫命の箸墓

奈良県桜井市箸中に「**箸墓**」(3世紀中~後半)がある。崇神天皇の叔母で巫女だった倭迹迹日襲姫命の墓とされている。

『日本書紀』によると、倭迹迹日襲姫命が、夜だけ通って来る男(大物主神)の正体が小蛇であることを知って、驚き、ドスンと座ったところ、そこにあった箸で陰部を衝いて、死んでしまった。そこで葬られた彼女の墓を「箸墓」と謂うようになったとしている。

ところが、『古事記』では、この話は活玉依姫と大物主神のこととなっている。しかも箸の話は載っていない。

とすれば、このエピソードは『日本書紀』のオリジナルということになり、むしろこの後に続く「この墓は、日中は人が作り、夜は神が作る」の方に意味があると思われる。つまり、墓造りは神懸かりの時代から、人力で造る時代になったとの墓を造成したであろう**土師(はにし・はじ)**氏のメッセージだったのではないか。ということは、「土師ノ墓」が訛って「箸墓」となっただけで、箸とは無関係であろう。

「そんな…」と不満にお思いの方のために、「箸墓」のある地区を「箸中」というが、それは「箸墓」が訛って「箸中」になったのだと正式に地名辞典に載っている。伝説には、訛って物語として膨らんだものが多いのである。

2)神功皇后の箸占い

神功皇后が新羅を攻める前に、墨江(スミエ)の神のお告げにしたがって、箸を海に浮かべて戦勝を占ったと『記紀』にはあるが、正直いってよく理解できない。

「理解できない」というのは、この場合の箸にどういう意味があるのかが分からないということであるが、代わりに背景の古代史はだいたい想像がつく。

まず、「神功皇后」というのは諱名であって本名は「息長帯比売(チカガタシメ)」といった。「息長」というのは文字通り海に潜って息を長く止めておくことのできる「海女」のこと、「タラシ=垂らし」とか「タリ=足」は、当時多く使われていたが「大」とか「長」みたいな意味をもつ。昭和式の名前でいえば、「一子ネエサン」みたいな名前であろう。話の中に登場する「墨ノ江(住吉)」とは、筑紫の漁夫のこと。漁夫というとイメージが狭くなるので、海人族といいかえてもよい。古代の北九州には宗像(胸形)族、安曇族などの今でいう入墨をした海人族がいた。スミノエも、ムナカタも、アズミも、入墨のことであり、その存在は『魏志倭人伝』の描写と一致する。

やがて彼らは近畿へ東遷し、倭国を建てたために一族は列島全土へ広まった。すなわち、墨江族の足跡は住吉神社となり、安曇族の足跡は近江の安土や信州の安曇、あるいは渥美半島(愛知)として残っている。そうした海人族の功労に敬意を表し、神話に挿入されたのである。

したがって、神宮皇后伝説というのは、決して倭国政府が新羅国を攻めたというのではなく、北九州

の墨江族という漁夫たちが息長帯比売を先頭に立てて暴れた(倭寇)というのが真実であろう。

また、列島における古代海人族の存在は北九州ばかりではなかった。出雲(島根)、但馬(兵庫)、若狭(福井)、越(北陸三県)や瀬戸内海(中・四国)にも多くいた。

そういえば、日本は昭和40年代ごろから車社会が到来し、すっかり陸の民へと変貌した。そのため、われわれの記憶が失われつつあるが、それ以前の日本の河川には舳舟(ハツ)や船が犇めき合っていたことを情景として思い浮かべる。

そう。かつての日本人は陸にあっては水田にまみれ、河川では舟を足代わりにして「水の民」であった。そうした日本人の由来をこの神話に彷彿させるところがある。

けれども、もう一度言うが、やはり何を目的としてこの項に箸が登場したのかよく分からない。

だが、このとき、私の脳裏をかすめた物がある。それは大嘗祭で使用されるという神器「折箸」である。

なぜ折箸は神器となったのか？

もしかしたら、息長帯比売ら墨江族が、新羅から持ってきたという折箸がゆえに、このような神話に成長したのかもしれない。

3)大嘗祭の折箸

多くの史料によると、大嘗祭の折には折箸が使用されるという。

大嘗祭というのは天武朝から始まったとされているが、天皇即位後、最初に行われる新嘗祭のことである。

そんな神々しくも厳粛なる儀式の様を目撃できた人はまずいないだろう。だから、たいていの研究資料には「…という」という言葉で表現されているが、それによると、儀式の折には竹を折ってピンセット状にして、食べ物を掴んだり挟んだりするという。

だが、想像してお分かりのように、ピンセット状は物を挟んで運ぶにはよいかもしれないが、それでもって食べることは少し難点がある。

それでも、折箸は縄文人の一本の小枝を使うより進化している。すなわち、

ア)一本の枝箸は突き刺す機能しかないが、

イ)折箸には挟む機能があり、それによった食べ物を移すことができる。

ウ)そして二本箸になったとき、突き刺し、挟み、口に持っていけるようになった。

そういう意味では、折箸は一本箸から二本箸への架け橋的存在である。

こうした進化論から見ても、

ア)縄文時代＝1本の小枝、

イ)弥生・古墳時代＝折箸、

ウ)飛鳥時代＝2本の箸、

の存在が見えてくる。



【折箸 ☆ ほしコレクション】

4)須佐之男の箸

『記紀』にある「須佐之男の大蛇退治」は有名な話だから、ご存知であろう。

須佐之男が、出雲國の肥の河上の鳥髪(島根県斐伊川船通山)という地に降りたら、河上から「箸」が流れてきた。須佐之男は、箸の流れてくる河上に村落ありと考えて、河を登って行った。そして村人に頼まれて大蛇を退治することになるが、この物語の鍵は「箸」である。

なぜなら、箸＝料理は文化度のシンボルという面をもっている。それ故に野蛮国紹介の『魏志倭人伝』では蛮国の倭は「手食である」と紹介した。

対して、天武朝に編纂された『古事記』『日本書紀』は、大和国は神代の昔から「箸」を使っていた文化国家であると宣言した誇りの書だといえよう。

それに、「米を主食」としたのも天武朝からとされている。そのご飯と箸は切手も切れない関係だ。それゆえに小野妹子以後の日本は、本格的に箸を使用しているのだという事実の主張もあるのだろう。

その証拠として、飛鳥時代以降の箸の出土は多い。

【檜の箸 ☆ ほしコレクション】



- ・7世紀後半の、飛鳥板蓋宮や藤原宮跡から檜の箸
- ・8世紀頃の、平城京や長岡京跡から檜の箸

7.空海の「命のはし渡し」

かように、箸が宮廷で使用されたのは分かるが一般ではどうだろう？

そのことを探りたくて徳島県池田町の「箸蔵寺」を訪ねたのであるが、そもそも弘法大師空海が開基した古刹が、なぜ「箸蔵寺」と呼ばれているのか。寺名からしても、曰く因縁がありそうではないか。

箸蔵寺は、徳島駅からJR土讃線で箸蔵駅に至り、そこからロープウェイで登った箸蔵山にある。途中、ゴンドラの中から下界を見ると町が一望できる。

聞いた話によると、ここ池田町は四国の臍、つまり四国の中心にあたるというのが、「臍」と自認しているところに、地元の人々の誇りを感じる。

ロープウェイを降りると、すぐ箸蔵寺の本坊、護摩殿、本殿、天神社、薬師堂、鐘楼などが並んでいる。いずれも江戸時代の築で重要文化財に指定されている。軒や柱や板壁の彫り物も見事である。屋根を見ると、瓦製の獅子がこちらを見ている。池田町の建物というのは特色があって、寺院はむろんのこと、民家ですらこうした飾り瓦が付いている。日本の建築物では、茅葺屋根は既に滅び、今や瓦屋根も消えつつある現代において、このような立派な屋根を持つ町並みは、貴重な景観である。

さて、四国には空海伝説がいたる所に存在し、四国一島が空海の結界の中であるといっても過言ではない。真言宗箸蔵寺もまた伝説に満ちているが、そのことは後で紹介するとして、今夜は伝説たゞよう当寺の宿坊に泊まることにした。

案内された部屋は八枚の襖に囲まれた十五畳の大きい部屋だった。襖には墨で描いた松竹梅柳が林立していた。隣の部屋も、奥の部屋も墨絵の襖だった。しかし絵は少し荒っぽいというか、どこか違和感があった。賛を見ると、「昭和十九年」とある。私と同じぐらいの年齢を重ねた襖だと思えば、奇縁を感じる。

私は部屋の真ん中で大の字になった。東京からの旅であったから、少し疲れたためであった。すると、どうであろう。寝転んで観る、襖の木々は妙に迫力があつた。まるで林の中で寝転んでいるような錯覚におちいったのである。

「ひょっとすると、この画家は、寝転んでこの木々を描いたのだろうか！」とさえ思った。そして「これじゃ、まるで露伴の『観画談』の世界ではないか」とも思った。幸田露伴の『観画談』というのは、奥州の山奥の、とある僻村の真言宗の寺を訪ねた主人公が、草庵の壁に懸かっている画の中の船頭に「オーイ」と呼ばれ、思わず「今行くよーッ」と返事をしそうになったという幻談である。私は今日、露伴は実体験を小説にしたのだろうかと思った。

夕方の6時になった。護摩祈祷の時刻である。護摩堂に行くと、火がパチパチと音を立てていた。待っていると、ご住職が入って来られ、太鼓が鳴り、読経が始まった。開山以来、毎日朝夕二回行っている伝統あるご祈祷だという。

祈祷が終わってから、御朱印を捺してもらい、当寺のお箸である「而二不二箸」を求めた。それから風呂に入り、夕飯を頂いた。献立は当然、精進料理であった。

部屋に戻って、ふたたび不思議な襖絵を観るともなく、観ていると、ご丁寧にもご住職さんが部屋に来られた。私は、箸蔵寺の箸伝説についてお話を聞かせてもらった。

～ それは**828年**(淳和天皇の代)のことだという。この地を訪れた空海(55歳)は、箸蔵の山頂にたゞよう不思議な雰囲気に導かれ、この山に登ってこられた。そのとき出現した妖魔を調伏したところ、金毘羅大権現が現れ、「衆生救済のため讃岐の象頭山(金比羅山)と箸蔵山を往来するための道場を建てよ」とのご神託があつた。そこで空海はこの山に七堂伽藍を建立し、自ら薬師如来を刻んで安置して、「箸を挙ぐる者すべて(=箸を使う人→すべての民)を救う」と誓われたのであつた。これが箸蔵寺の由来であり、讃岐金刀比羅宮の奥の院と称する所以でもあるという。

讃岐の金比羅さんのお祭のときに使われた神箸を、天狗が箸蔵山に運んできておさめるという「天狗の箸運び」伝説も、空海以来の二つの寺社の関係を物語るものであり、また昔は讃岐の金比羅さんに参拝する人は必ず阿波の箸蔵寺にも参詣したという。～

これらが当山の箸に関わる伝説である。

当寺では、こうした弘法大師ご開創の古事にならい、8月4日に箸供養が盛大に行われている。

この空海伝説を箸から考えてみると、「箸を挙ぐる者すべて」⇒箸を使う人⇒すべての民ということになり、おそらく9世紀ごろは日本人のほとんどの民が箸を使っていたことをいうのであろう。

最後にご住職が「箸というのは、食を口に運ぶ道具ですが、単なる道具ではなく、命のはし渡しをするもの。これが「箸」の意味するところだと思います。」とおっしゃったが、このことは食を考えるときの根本だと思う。



【箸蔵寺の箸 ☆ ほしコレクション】

8.白箸の翁



【白箸の翁】

9世紀ごろは日本の民は箸食になっていたとするなら、当時の人はその箸をどこで求めたのだろうか？

回答は、『本朝文粹』(1058～65刊)の中の紀長谷雄の「白箸翁詩序」にある。それには「貞観の末、市中にて、箸を売っている翁がいた」ことを紹介している。つまり、「貞観(859～877)の末」というから870年代だろう、京に箸を売る商いをする者がいたというので、日本箸史では箸店の初めが「白箸の翁」としている。

ただし、箸を売る商いが現れたとしても、商売になるのは人の多い都だというのが、この話の背景だろう。

箸屋という商売が成立つことと、日本人に箸食が広まることは表裏の関係にある。それゆえに、この白箸の翁の民話も捨てがたいのである。

9.芒の箸の神事

ところで、食物史に関心を寄せている私は、かように箸にも興味をもっているが、どうしても気になることがある。それが、当地の芒のお箸で饅頭を食べる民行事である。

～7月17日16時半、茨城県石岡市の青屋神社で青屋祭が氏子によって催された。例祭は、宮司の打つ太鼓で始まり、最後に御神酒を頂いて終了する。

- 一、太鼓
- 一、お祓い
- 一、祭主一拝
- 一、献饌献灯
- 一、祝詞奏上
- 一、玉串奉奠
- 一、祭主一拝
- 一、撤饌撤灯
- 一、太鼓
- 一、御神酒

この後、地区の集会所で行われる直会では、芒のお箸で饅頭を食べるのが習わしになっているという。～

この行事の由来は、奈良・平安の律令時代に遡る。そのころの列島には約60の国があり、各国には役所があった。その役所を国庁という。今でいえば県庁みたいなものである。そして他の官庁を含む官庁街を国衙、さらにそれを取り囲む町を国府とよんでいた。ここ常陸国の国府は現在の石岡小学校の敷地にあった。

都から常陸へ着任した国司は、鹿島神社に参拝するという決まりがあった。その参拝は高浜から霞ヶ

【青屋祭の芒の箸 ☆ ほしコレクション】



浦を船で行くのが順路であったが、荒天で出航不能のとき、高浜の渚に芒、葦、真菰などで青屋(仮屋)を作り、そこから鹿島神社を遥拝し参拝にかえた。それをいつしか「青屋祭」とよぶようになった。近世になったころ、その青屋祭神事は現在の石岡小学校近く辺りで行われるようになっていたらしい。

歴史書によれば、六月二十日(旧暦)の深夜、2人の者が青い芒や細竹で青屋(仮屋)を作り、神拝は翌二十一日の午後4時から始まったという。

明治中期になると、神拝の場に小祠が建てられた。それが今日訪れた青屋神社である。

そして例祭の後の直会では、芒で作ったお箸で饅頭を食べる習俗として、古代国司の遥拝の精神が今も受け継がれているのであるが、仮屋(青屋)を建てた芒を材にしてお箸を作るということは、各地の神社の神木でお箸を作ることと同じであると思う。

ところで、石岡市の青屋祭はたまたま国司の伝説と相俟って、行事として生き残っているが、古い本を見てみると、このように芒で食事をする民俗行事は千葉や神奈川界限ではかなりあったようである。

これはどういうことか？

それについて、食の研究者近藤弘は古代日本には次のような箸圏があったと想定してる。

- 出雲系の神々は栗箸
- 天孫系の神々は杉・檜・柳箸
- 東国は芒(萱)などの青箸圏であった、と。

そういえば、常磐線に乗って石岡の手前に「神立」という駅があった。

神立といえば、箸にちなむ神話「八岐大蛇」で流れる斐伊川に「神立橋」が架かっている。ここで作られる胡麻竹の箸を「神立箸」というが、私は「神立駅」を通過したとき、東国にも青箸文化圏があったであろうことを直確した。

つまり、古代日本人には、箸から見ても三種の民族がいたという説は正しそうである。

また、優れた随筆家である白洲正子は、京都の老舗の箸店主・市原平兵衛との対談で、次のよう述べている。

「箸は、手づかみでは熱いので、かたわらの木片を用いたのが最初であろう。」

「九州に行った時、佐賀の山奥で、栗を皮つきのまま割った箸を発見した。栗の木を剪定した後の枝を利用したもので、・・・栗の実が神様へ供えるものだから、あやかりたいという願望もあるのだろう。今の言葉でいえば、これが日本の箸のルーツだと思う。」

こうした声をふくめて、近藤弘の箸圏を今流に翻訳すれば、

- ◎北部九州・山陰圏の人種は栗枝の箸
 - ◎近畿圏の人種は杉・檜・柳箸を使用
 - ◎東国の人種は青箸(芒の茎)
- ということになるだろう。

【栗枝の箸☆ほしコレクション】



しかしながら、一般的には文献学・考古学の証拠がなければ、論として通用しないといわれる。前者を「正史」といい、今日の「青屋祭」のごとき神事は現実には在るにも関わらず「民俗」として脇に置かれる。

それゆえに、日本の箸の正史は、小野妹子の代から始まるとされる。

しかしながら、私は必ずしも直接証拠ばかりが真実を語るものではなく、状況証拠にもそれは包み込まれていると思っているが、箸の場合も、傍に置かれているアイヌのパスィとか、芒の箸を研究することによって、さらに正史は完成するであろう。

そうしたとき、おそらく縄文人以来の土着的前箸文化があって、その上に中国式箸・匙文化が新しく加わっただろうということも解明されるかもしれない。

さて、青屋神社の氏子の人たちは親切であった。余所者の私に、芒の箸で「饅頭を食べていけ」と勧める。私も、「せっかくだから」とご相伴に預らせてもらった。芒の茎は思ったより、しっかりしていた。それにしても、「芒のお箸」で物を食べる習俗を守り続けているこの地区の氏子たちの神々しいまでの精神である。さすがは常陸国府の民の末裔だと頭が下がるというものではないか。

10.今の箸

1)塗箸

ともあれ、日本人は一般人まで箸食となり、箸屋という商売も成立するようになった。

そして、江戸初期になると、各藩は自國の産業育成のために漆器や塗箸を開発し始めた。その塗箸の初めは**若狭塗箸**だといわれている。他に輪島塗、津軽塗、秀衡塗、会津塗、江戸塗、鎌倉塗、村上堆朱、木曾塗、飛騨春慶塗、後藤塗、藍胎塗、琉球塗など百花繚乱の感ありである。

古い時代の箸は捨てられていたかもしれないが、塗箸になってから捨てなくなった。今の言葉でいう家庭での「マイ箸」生活は、この塗箸がなければ生まれなかつたらう。

「マイ箸」、そして「マイ飯碗」「マイ茶碗」は世界でも珍しい生活スタイルである。



【名前入 箸
☆ ほしコレクション】

2)割箸など

一方では使い捨ての割箸も誕生した。

14世紀(南北朝時代)のころ、吉野下市地方の箸産業者が、後醍醐天皇に杉箸を献上したと伝えられているが、割箸は、その吉野下市の**杉原宗庵**という人が杉の余材を見て**1827**年に思い付いたという。

一時は、「余材」利用ということを知らない人たちが、モッタイナイと指摘していたが、今は衛生的として世界中に広まりつつある。



【アメリカの割箸、中国の割箸 ☆ ほしコレクション】



11.日本箸の思想

1)日本箸の思想

青屋祭の芒もそうであるが、わが国では**神木**で箸を作ることはよく見られる。

白洲正子は、1)神木で箸を作ることは、2)食事の前に「**頂きます**」と礼拝する行為同様日本人の「**箸の思想**」であると言っているが、もう一つ「**箸に思想**」を感じる点がある。

それが**3)箸を横向に置く**ことである。

食事の前に「頂きます」と礼拝し、横向に置かれた神木製の箸を取り上げる。まるで「**食の結界**」に入っていくかのこどく「**日本人感**」がこみ上げてくる。

かように、日本人は箸を**横**に置く。そして、箸発祥の地とされる**中国**は箸・匙を**縦**に置くというのが、現代の生活習慣である。

ところが、中国においては、唐(618~907)の時代までは横に置いていたのが、その後の**五代十国(907~960)**時代あたりから**縦**に置くようになったことなども近年の

【神木の箸 ☆ ほしコレクション】



研究で明らかにされている。

では、日本の横縦の問題はどうなっているのだろうか？

日本文化史学者の山内昶の『食具』では、『厨事類記』(11.12世紀頃刊)の図では箸・匙が縦に置いてあり、『類從雜要抄』(1146年頃刊)の図では箸・匙が横に置いてあると指摘している。つまり、**12世紀前期ごろに縦置から横置に変わった**というのである。

もっとはっきりいえば、これも**鎌倉時代以降の日本の大変革の一つ**であり、この「エッセイ集I」で論じた、**武士の時代に「和食」が登場した**との説ともつながる話であると思う。

このことを山内昶は「**座る**」という生活変化の視点から説明している。

*唐・五代十国時代までは床か牀に跪坐していたが、宋(960~1279)時代になると椅座するようになった。

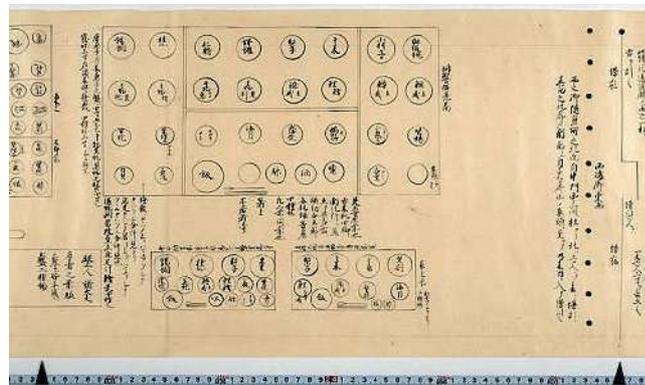
*反対に、日本では平安時代までは椅座し、鎌倉時代から床や畳の上に端座安座するようになったつまり、**端座・安座食の箸は横置、椅座食の箸は縦置**だと解明しているのは面白いと思う。



【唐の横置(長安県南里王村墓室壁画 HP より)】



【日本の縦置(東博 HP より)】



【日本の横置(京都大平松文庫 HP より)】

2)道元、食の思想

日本の料理界に革新的な影響を与えた人物として**道元**が(1200~53)いる。彼の仏教界の功績はここではおくとして、食の世界においては《六味》という視点を持ち込んだところが画期的であった。もっとも先人の**榮西(1141~1215)**が《五味》(「甘い」「塩っぱい」「酸っぱい」「辛い」「苦い」)を唱えていたが、道元はそれに「淡い」を加えて《六味》としたのである。この「淡」という考え方こそが、現在の「和食」界の基礎となるのであるが、そのことは別の項で改めて述べることにし、道元のもう一つの大きな業績として『**典座教訓**』(1237年)『**赴粥飯法**』(1244~46年)があることを決して忘れてはいけない。

『典座教訓』には、禅院の食事をつかさどる典座の職責の重要さと、典座の仕事そのものが、自己の修行そのものであると述べてある。

また『赴粥飯法』には、食べる側の修行僧のための心得が述べてある。

その内容は、たとえば『赴粥飯法』では次のような《五つの瞑想》を掲げている。

《五つの瞑想》

一、功の多少を計り、彼の来処を量る。

食材の経路、料理の手数の多いことを考えてみよう。

一、己が徳行の全欠を付って供に応ず。

食事を受けることは供養をうけること。

一、心を防ぎ過を離るることは、食等を宗とす。

常日から、迷い、過ちを犯さないよう心がける、その元は食事の場にある。

一、正に良薬を事とするは、形枯を療ぜんが為なり。

食事を頂くことは、良薬を頂くことである。

一、成道の為の故に、今此の食を受く。

食事を頂くことは仏道を成就するという大きな目標がある。

これが今、私たちが箸を手にしながらかけている「頂きます」「ご馳走さま」の原点になった。

12.アジアの箸文化圏

箸の発明は中国である。戦国時代(前 403～前 201)末期から前漢時代(前 206～8)にかけて中国南部で発明された。遺跡からは祭祀用と思われる青銅箸も出土しているが、字に竹が付いているから、最初は竹製が主だったのだろう。



【竹の箸 ☆ ほしコレクション】

なぜ南部か」というと、南部は粘り気のある「ジャポニカ種の稲」だったので、それを食べるには匙より箸で掴む方が食べやすかったからだといわれている。

しかし、始まりは「ジャポニカ種」であったが、掴む機能をもつ「箸」は「麺」を食するにも向いていた。

したがって、中国箸は、南はベトナム、北は朝鮮半島、日本列島などの米食・麺食民族の国へと伝わっていくことになり、その結果「東アジア＝箸・米・麺 文化圏」が形成された。

各地における箸の形・材料・使い方は、現地の食事情と相俟って、各々独自の箸食文化を創り上げていったことはいうまでもない。

日本	材料	木・竹、近世から漆・割箸が主流
	長さ	銘々膳だから、箸は中国より短い
	形	箸先は尖っている
	置き方	手前に横置
	食べ方	食器を手を持つ
韓国	材料	焼物に都合のいい金属製が主
	長さ	箸は中国より短い
	形	箸先は平、匙は浅い
	置き方	ご飯左・汁右、匙左・箸右にして右側に縦置。横置もある。
	食べ方	食器を手を持たない
中国	材料	昔の箸は象牙・金銀、現在の箸は木・竹製、匙は陶磁器
	長さ	広くて大きな卓だから、箸も長い
	形	箸先は丸い、匙は深い。
	置き方	右側に縦置
	食べ方	食器を手を持たない、韓国より匙は使わない。



【ベトナムの箸】



【中国の箸】



【韓国の匙・箸】



【モンゴルの箸・刀 HP より】

【上3点 ☆ ほしコレクションより】

13.明日に架ける橋

思い付くまま、「嘴から橋まで、間人、柱、梯子、舂舟を含めて、箸にまつわる話」をしてきたが、ここでまとめになにないまとめをしてみよう。

英語では、「Beginning」と「End」は明確に違う言葉だけれど、日本語にすれば初め (Beginning)と端 (End)となる。

「ハジ」と「ハシ」・・・、結局は「輪廻」のように繋がっているように感じるが、それも日本人がもつ自然観からだろう。

だからなのか？ 日本の民俗行事には、生まれれば「お箸初め＝お食い初め」から始まって、正月元旦や結婚式などには「祝箸」を使い、そして亡くなった後の盂蘭盆では「麻幹箸」(カハラバシ)が供えられる。

まさに人の一生は、箸に始まり箸で終わるということになるだろう。

最後に、この拙文が日本食文化の明日への架け橋となれば幸いと祈りながら、箸を置くことにする。



【祝箸 ☆ ほしコレクション】



【麻幹箸 ☆ ほしコレクション】

☆ 箸 略史

縄文時代	縄文土器、煮る
238年	親魏倭王 卑弥呼 『魏志倭人伝』に「手食」の記事あり。
552年頃	仏教伝来
581年	隋建国
592年	推古天皇即位
593年	聖徳太子摂政となる。
600年	最初の遣隋使
604年	憲法十七条発布
607年	小野妹子遣隋使となる。
608年	妹子裴世清を伴い帰国、大和国で正式に箸・匙食法が採り入れられる。 妹子再度隋へ
609年	妹子帰国
645年	大化改新
710年	平城遷都
712年	『古事記』
720年	『日本書紀』
794年	平安遷都
828年	空海、箸蔵寺創建
870年頃	白箸の翁
12世紀前後	座して和食を食べるようになり、箸は横向きに置くようになった。
1237年	道元『典座教訓』撰述

1244～46年	道元『赴粥飯法』撰述
江戸初期	若狭塗の箸が登場
1827年	割箸が登場

☆箸々の紹介



【日枝神社の箸感謝祭】



【寺社の箸】



【菊御紋箸】



【携帯用の箸】



【蕎麦産地の箸】



【蕎麦屋の箸】

《参考》

- ・村上春樹『ポートレート・イン・ジャズ』（新潮文庫）
- ・須賀敦子「橋」（『地図のない道』新潮文庫）
- ・後藤和民『縄文土器をつくる』（中公文庫）
- ・千葉市立加曾利貝塚 佐藤洋氏のメール
- ・E・S モーム『大森貝塚』（岩波文庫）
- ・森豊『写真 登呂遺跡』（現代教養文庫）
- ・ヘンリー・ペトロスキー『フォークの歯はなぜ四本になったか』（平凡社）
- ・萱野茂『アイヌ歳時記』（平凡社新書）
- ・梅原猛・埴原和郎原和郎『アイヌは原日本人か』（小学館）
- ・『魏志倭人伝』（岩波文庫）
- ・佐賀新聞社『邪馬台国が見つかった』（角川文庫）
- ・『古事記』（岩波文庫）

- 『日本書紀』(岩波文庫)
- 内田康夫『箸墓幻想』(角川文庫)
- 梅原猛『日本学事始』(集英社文庫)
- 平成 28 年 7 月 17 日青屋神社の青屋祭
- 近藤弘『日本人の求めたうま味』(中公新書)
- 白洲正子『日本のたくみ』(新潮文庫)、
- 山内昶『食具』(法政大学出版局)
- 栄西『喫茶養生記』(講談社学術文庫)
- 道元『典座教訓 赴粥飯法』(講談社学術文庫)

*ほしひかる ・特定非営利活動法人 江戸ソバリエ協会 理事長
・エッセイスト

[終]